

十一世紀にむけて幼児教育を考える(13)

具体的体験世界の 中での人間形成を

小川 博久

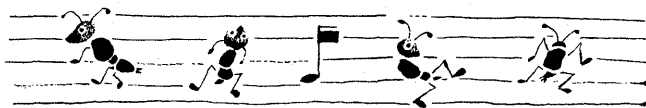
J・ピアジェが子どもの発達について多くの業績を発表し、子どもの発達には、一本の筋道のようなものが普遍的に存在するといった信念が、二十年前まで教育心理学者のみならず、多くの幼児教育関係者にも広く行き渡っていた。しかし、今や、ブルーナーやコールらの研究を端緒として、発達は一筋一本の筋からなっているという信念は、失われつつある。また、フリーップ・アリエス、N・ポルトマンなどの研究も、子ども期が確固たるものをして存在するという信念をゆさぶっている。また、教



教育学の分野では、ポスト・モダンといわれる研究が、既成の学校教授学を基本とする教育学の啓蒙的規範性を批判し、学校それ自体の機能を当然視するこれまでの教育研究の問い直しを迫っている。

しかし、こうした変化を声高に云々するのは、学者や評論家と称する人々で、現実の学校生活や幼児の園生活のリズムや期間計画や年間計画はほとんど変りはないかのようである。学校や幼稚園の生活が、まりを中心とした考え方で厳密な時間区分の中で展開され、三歳から五歳までの保育活動は、三歳用、五歳用と、おとなの決めた活動を幼児にやらせるといふ形で決定しており、三歳の十月と四歳の十月とは、同じであってはならないという信念で行なわれている。また、一般の社会生活では日々影がうすくなっている民間の年中行事の中で園生活だけが園行事に追われる日々になっていることが多く一斉に幼児を参加させ、適応させる。これへの父母の支持も高い。その活動に「ついていけない」といわれたら、それは、その年齢にふさわしくない状態にあるがゆえに、「発達の遅れ」と称されたり、大多数の幼児から逸脱したという理由で「社会性」が欠如しているとされたりする。こうした実践も決して少なくはない。

また家庭では、幼児たちの降園後の生活は時間刻みに拘束されることも多い。学習塾やおけいこごとに行くことがほぼ三人に一人はいる。ここでの活動プログラムは、



幼稚園よりもさらに一本の「発達」と称するラインに沿って評価され、「有能である」「ない」の区別は鮮明である、今や二十年、三十年前の幼児の生活の余裕はなくなっている。しかも、多くの親たちは、それを当然のこのように幼児たちに求める。それは幼児たちがそうしたいといっているからあるいはかくれた才能がみつかるかもしれない、という理由で。

一方、社会に目をむけると、この二十年間を見ただけでその変化は目に余る程だ。まず、幼児の保育を担当するおとなを含め、おとなたちのくらしが変った。職場における年功序列は崩れつつある。年配者よりも、若い世代の方がパソコンの利用率は高い。男性の方が女性より優れているという前提は神話に過ぎなくなってきた。夫婦別姓も当然視され、男性が一般的に育児休暇を取る日も近い。

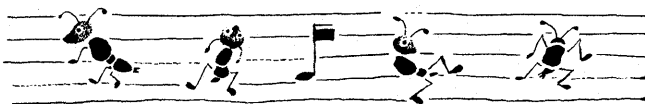
一方、文化の面でも既成の価値序列は崩壊の予兆をみせている。あらゆるスポーツに女性が進出し、男女差を個人差におき変えている。自衛隊への女性の進出も著しい。男女が好む世界もモノセックス化している。漫画、園芸、ジャーナリズム等々、送り手も受け手も男女の差はなくなりつつある。

一方、世代的秩序はどうか、前述のパソコンの利用にみられるように、年齢の差が、地位、財力、能力差を生むという神話を裏切る現象もじわりくと増大している。長幼の序という言葉が死語になる日も近いかもしれない。日本社会の高齢化は、



老人問題を社会のお荷物ととらえる価値観を内包しつつある。中年層にとって老人と
の生活の共有を回避したい気持ちは強い。老人の在宅介護をできれば公的施設に肩替
りしてほしいという想いは強い。特に十代の子に見る年齢層へのまなざしは、「政治」「演
歌」など成人の世界に無関係で若人文化のみを価値あるものとする傾向を生んでい
る。

こうした現象は、よきにつけあしきにつけ、時代の流れとして受けとめざるをえな
い。同時にそれは、人間が幼児期から次第により高次の生きるための価値に向って上
昇するという発達観の潜在的前提を支える社会的基盤を序々に切り崩しつつある。そ
の結果、直線的に上昇する発達観は、学校変化にのみ存続する神話となっていくだろ
う。その結果、学校教育を受けている間は、その神話に呪縛されながら、巷に出たと
たんそれからの解放を志向することになる。若者たちは大衆文化の中で発達序列の
ニッチ（生態学的生存位置）からの解放を主張しながら、学校文化の中で、その強い
拘束にしばられつつっていくことになる。そして社会に出れば、学校文化を支配する
発達観の中の自分の位置（生態学的位置ニッチ）を宿命的に受けとめながら、そ
れが貨幣価値に置き替るといふ現実、またこの現実を乗り越えるのも貨幣価値である
ことを実感している。ブランド志向はその象徴である。援助交際もこの現実からの容
易な脱出かもしれない。



こうしたニッチに拘束されているという現実のトラウマは、結婚しても子育てはいやだ、子どもはほしくないという傾向を生むことも当然考えられる。このトラウマは生んでしまった子育てにも影響し、他者依存の子育て状況をつくることにもなる。保育者を志向する若い世代が未だ少なくないが、彼女たちの動機はおとなの対極にあると考える「純真無垢」な存在としての子どもである。だから現実には裏切られたと感ずることも少なくない。

こうした見方は、時代の変化として引き受けなければならないとしても、二十一世紀を迎えて乗り越えるべき課題を提示する。それは、男女の問題、世代間格差の問題、発達観の問題に共通する“観念的に抽象化された人間観”である。日常生活の感情の交流を前提としない人間観である。今、始めるべきは、世代を越えて、日常生活の雑事を一つ／＼大切にすることでお互いを感じあう具体的体験である。人ひとりひとりを皮膚感覚で共有し合う体験だ。その基礎体験の場が幼児期にある。幼児教育の課題もそこにしかない。

(東京学芸大学)

